

## ●中央図書館に関する検証について

### (1) 中央図書館の機能について

第2回部会資料5「中央図書館について」で示した中央図書館が抱える施設の課題、①蔵書能力の不足、②閲覧スペースの不足、③レファレンス機能の不足、④施設建物の老朽化と耐震上の課題の他に、以下のような側面からも検討が必要である。

#### ① まちづくりから見た図書館

図書館は、利用対象者の年齢が限定されていないことや、個人利用が中心であることが特徴で、幅広い市民に継続して利用される、集客率・リピーター率の高い公共施設であることから、近年ではまちづくりの中核施設としての役割を持つことも多い。

本市における市民ニーズの面でも「西東京市市民意識調査報告書」(平成27年10月)によると、本市の公共施設の年間利用の回数が図書館は最も多い68.1%の市民が利用しており、芸術文化の分野では『現在の満足度』『今後の重要度』ともに「図書館サービスの充実」のポイントが最も高くなっている。

こうした背景を踏まえ、高齢者層の増加に対応した設備・サービスの導入や、成長の各段階にある子どもたちの居場所・学びの場としての環境整備を行うとともに、勤労世代が余暇を過ごしたり調べ物をしたりするのにもふさわしい場となるよう、全世代対応の観点から多様な機能を確保していくことが求められる。

#### ② 滞在型図書館

1980年代の図書館は、館外貸出しや予約が利用の主な目的であり、利用者の滞在時間も短かったが、1990年代以降は、扱う資料の種類が増え、特に中央図書館はレファレンスや読書活動支援など提供するサービスが多様化し、利用者の滞在時間が延びる傾向にある。

#### ③ 施設規模の拡大傾向

第3回部会資料4「他市における中央図書館の現状について」に示したように、建設年が新しい施設は床面積が拡大傾向にある。特に2000年以降に竣工された多摩地区の中央図書館施設は床面積の平均が4,036㎡となっている。

なお、これらの新しい図書館の平均と多摩26市の平均とを比較したとき、蔵書数では26市平均の方が多いのに対し、座席数では26市平均の方が少なくなっており、相対的に閲覧機能の拡充が重視されている傾向が読み取れる。

## (2) 中央図書館の規模について

### ① 現状の中央図書館施設と必要な床面積について

〈表1〉は平成26年度の中央図書館の蔵書数の内訳を一覧にしたものである。

現在の中央図書館の資料(主に図書)を収容している床面積の合計1,043㎡に入る蔵書数は16.5万冊のところ、現状は、約1.5倍の24.3万冊を収めている。そのため、収容率が全体に超過し、特に地域行政資料室については収容率300%となっている。

〈表1〉平成26年度中央図書館の蔵書数の内訳

施設名称	床面積	収容能力	現状の蔵書数	収容率
開架室	795㎡	8.5万冊	12.8万冊	151%
地域行政資料室	68㎡	1万冊	3万冊	300%
書庫	180㎡	7万冊	8.5万冊	121%
合計	1,043㎡	16.5万冊	24.3万冊	147%

現状の蔵書数24.3万冊を収容するために、各室とも面積当たり収容能力は現状維持として単純に床面積の拡大のみで対応するとした場合、〈表1〉の床面積と収容率から、〈表2〉に示すように1,623㎡が必要と算出され、現在より580㎡拡張すれば、現在の蔵書が収容しきれない状況は解消される計算となる。

〈表2〉現状の蔵書数を収容するのに必要な面積

施設名称	現状の蔵書数	必要面積	積算根拠
開架室	12.8万冊	1,201㎡	795㎡×151%
地域行政資料室	3万冊	204㎡	68㎡×300%
書庫	8.5万冊	218㎡	180㎡×121%
合計	24.3万冊	1,623㎡	

## ② 多摩 26 市との比較について

多摩 26 市の中央図書館施設と本市の中央図書館の比較を〈表 3〉にまとめた。

床面積で見ると、多摩 26 市は 2 倍、類似団体は 2.4 倍、2000 年以降が 2.6 倍で、蔵書数では、それぞれ 1.5 倍・2 倍・1.7 倍と平均を下回っている。貸出数の面では余り大きな差はみられないものの、座席数はいずれとの比較でも大きく下回っており、滞在型の施設利用には対応できていない。

〈表 3〉多摩地区における中央図書館施設の規模・機能についての比較一覧

	西東京市	多摩 26 市平均	同等規模の 類似団体平均	2000 年以降の 新施設の平均
床面積	1,571 m <sup>2</sup>	3,200 m <sup>2</sup>	3,760 m <sup>2</sup>	4,036 m <sup>2</sup>
比率	100%	204%	239%	257%
蔵書数	25.2 万冊	37.8 万冊	49.7 万冊	42.1 万冊
比率	100%	150%	197%	167%
貸出数	60.7 万点	58.1 万点	68.6 万点	68.2 万点
比率	100%	96%	113%	112%
座席数	91 席	177 席	222 席	312 席
比率	100%	195%	244%	343%

次に、〈表 4〉にまとめた図書の貸出利用状況をあらわす蔵書回転率（個人図書貸出数÷蔵書冊数）をみると、蔵書数及び貸出数が上回る多摩地区の中央図書館は 7 市あり、蔵書回転率で比較すると、本市と同等以上の自治体は、青梅市、町田市のみである。

〈表 4〉蔵書回転率での比較

自治体名	面積 (m <sup>2</sup> )	竣工年	蔵書数 (千冊)	貸出数 (千点)	蔵書 回転率
西東京市	1,571	1975 年	255	607	2.4
稲城市	3,485	2006 年	314	636	2.0
調布市	3,611	1995 年	809	1,069	1.3
青梅市	3,860	2007 年	273	635	2.3
町田市	5,262	1990 年	541	1,582	2.9
八王子市	5,581	1984 年	966	1,130	1.2
府中市	6,077	2007 年	889	1,385	1.6
武蔵野市	7,529	1995 年	583	904	1.6

### (3) 中央図書館の提供する機能について

懇談会における議論、提言、図書館協議会からの意見等を踏まえ、今後の中央図書館が提供する機能の基本的な考え方としては、保有する資料が十分に活用できる環境の整備を重視すべきであり、館外への貸出資料が置かれているだけでなく、滞在できる場所や空間としての閲覧機能とレファレンス機能の向上を重点課題と位置づけて、スペース・設備・サービスのすべての面で拡充を図ることが求められている。

その実現のために、全体的な施設計画（内装・設備・配置・ゾーニング等）及び各個別機能の仕様や配置等の考え方の面で、それぞれ次のようなことに配慮する必要がある。

#### 【全体的な施設計画】

- ◇0歳から高齢者まで、幅広い年齢層の利用者を対象とする施設の特性上、利用動線に配慮する。また、職員のいるカウンターの位置から、書架や家具による死角を極力なくするなど、安全管理に配慮した施設づくりを進める。
- ◇成長の各段階にある子どもたちと大人がそれぞれ快適に利用できるよう、世代ごとのスペースづくりを考慮した機能・配置を工夫する。
- ◇新刊書の書架、展示架、新聞・週刊誌等、利用が集中しやすい場への配慮をする。
- ◇読書・学習・調査・研究等の「滞在型の利用」に配慮した環境づくりを進める。

#### 【一般開架書架】

- ◇一般資料は手に取りやすい高さに配慮した書架、専門分野や利用頻度の少ない資料については高書架を使用するなど、地域館を補完する資料の量と質に対応した書架づくりをする。
- ◇書架サインや案内板をわかりやすく工夫して設置し、利用しやすさを高める。
- ◇書架間の通路は、車椅子でも通りやすい余裕のある幅を確保するとともに、フロア全体の段差をなくし、誰もがストレスを感じずに利用できる空間とする。

#### 【児童図書コーナー】

- ◇ある程度の発声は許容することを前提に、大人が精読や学習を行うスペースからは距離をおいた配置とする。
- ◇読み聞かせを行う「おはなしコーナー」を扉のある確立した部屋として設ける。
- ◇小学生が学習に取り組むことのできるスペースを確保する。
- ◇子どもを視界にとらえて見守ることもできるよう、保護者を対象とした閲覧スペースを設ける。

#### 【青少年向け図書コーナー】

- ◇青少年が利用したくなるような音、採光、安全性に配慮した空間づくりをする。
- ◇個人利用だけでなく、グループ学習に対応した机や椅子等の家具を配置する。

#### 【AV視聴コーナー／ICTコーナー】

- ◇従来の録音資料に加えて、映像資料の取扱を開始するとともに、施設内での鑑賞を希望する利用者に対応する。
- ◇Wi-Fi 対応の環境を整え、また、聴覚障害者等へ電子掲示板等を設置し誰もが利用しやすい施設づくりを進める。

#### 【新聞・雑誌コーナー】

- ◇利用が集中しやすい新聞や週刊誌について、利用しやすさに配慮した配置を検討する。

#### 【地域行政資料】

- ◇中央図書館固有の機能として、西東京市に関する資料の収集・保存を行うとともに、テーマに沿った書架づくりや、市ゆかりの人物の著作を集めた特別文庫を作るなど、より一層の活用を図る。
- ◇古地図等の大きな資料でも広げられるような閲覧用の机や、電子化した資料が閲覧できる設備を整備する。

#### 【閲覧スペース】

- ◇書架のそばに読書用の閲覧席や机のある席を配置する。
- ◇音、採光、照明等に配慮し、ゆったりと読書できる滞在型の閲覧席と、調査・研究のための閲覧机と椅子を用意し、多様な学びを支援する。

#### 【レファレンス機能】

- ◇レファレンス専用カウンターを設け、よりサービスを利用しやすい環境を整える。
- ◇レファレンス専用の商用データベース等の情報検索端末を設置し、利用者の調べ物を支援する。

#### 【蔵書庫（保存機能）】

- ◇床面積当たりの収容能力を向上させ、図書館ネットワークを支える資料保存を行う。

#### 【事務室・作業スペース等】

- ◇図書館ネットワーク全体のサービス向上のため、録音資料の作成ブースや学校・保育園等との連携事業などで必要となる各種準備作業を行うスペースを確保する。

#### (4) 懇談会からの提言4案の比較について

懇談会で検討された4つの案における「メディア」機能の専有面積の規模について見てみると、〈表5〉のように、いずれの案も現状専有面積より大きくなるが、C案は閲覧席と蔵書能力向上は若干にとどまる。

また、多摩地区における中央図書館施設の規模との比較でみると、A案・B案であれば多摩26市平均と遜色ない又は上回る規模となるが、同等規模の類似団体の平均や2000年以降の新施設の平均よりは小規模である。

〈表5〉 提言4案との比較

		A案	B案	C案	D案
比較対象		2,430 m <sup>2</sup>	2,160 m <sup>2</sup>	1,675 m <sup>2</sup>	1,835 m <sup>2</sup>
①	現状専用面積 <sup>※1</sup>	188%	167%	129%	142%
②	多摩26市平均 <sup>※2</sup>	108%	96%	75%	82%
③	同等規模の類似団体の平均 <sup>※2</sup>	92%	82%	64%	70%
④	2000年以降の新施設の平均 <sup>※2</sup>	84%	74%	58%	63%

※1：2ページ〈表1〉に示した面積に事務室分253 m<sup>2</sup>を加えたもの

※2：3ページ〈表3〉に示した面積に0.72を乗じて得た値

\*他自治体施設については、統計上で施設規模としてされているもののうち専用分/共用分の内訳が不明であるため、現在の西東京市中央図書館・田無公民館の建物に準じて、共用部分が28%含まれている（専用部分は72%）と仮定して算定した値を用いて比較を行っている。

以上のように、A案及びB案であれば、多摩26市平均と同等の蔵書と床面積を確保できるが、現中央図書館でも既に多摩地区平均と同等かそれ以上の利用実績となっており、新施設が整備されると利用がさらに増加することも想定される。

新たな中央図書館を、レファレンス機能と閲覧スペースの充実した滞在型施設とするとともに、図書館ネットワークの中核施設として量・質ともに豊富な蔵書の保有しつつ十分なバックヤードも確保するものとして整備するためには、2000年以降に竣工された多摩地区の中央図書館施設の平均規模に匹敵する専有面積2,900 m<sup>2</sup>程度が一つの目標となるものと考えられる。